

2021年度新人発表会要旨

古代エジプト第18王朝のカノポス壺に関する一考察 —テーベ地域における変遷と製作体系—

進藤瑞生

発表者は、カノポス壺の多様な要素で分類や変遷案を提示し先行研究を検証すること、および製作体系を復元することを目的として、卒業論文で対象とした中でも特に第18王朝テーベ地域において改めて分析を行った。そして変遷と製作についての当該時期における卒業論文の成果に加えて、同じ被葬者の銘文作成において時には複数人の神官による下書きがなされた可能性など、卒業論文では指摘しなかった新たな見解も提示した。

藤岡産埴輪の再検討

横溝 優

古墳時代後期以降、関東地方において窯焼成技法の導入に伴う生産拠点の固定化により埴輪に地域性があらわれ、製作技法などから系統として把握されている。群馬県南西部で生産された埴輪の系統も「藤岡産埴輪」として把握されているが、その把握は胎土の特徴のみによるものである。他の系統と同様に製作技法などからの「藤岡産埴輪」の把握を目的に「藤岡産埴輪」の製作技法による属性からの分類を行った。

吉備地域における古墳時代中期円筒埴輪の再検討

岸田 彩

古墳時代中期の吉備は、南北に大河川が流れ、瀬戸内海に面した海上交通の要であった。周辺地域との交流状況からその様相を解明するため、本稿では量産品であり、かつ大きさや形状から運搬可能であったと考えられる円筒埴輪を媒体とした検討を行った。形態的特徴による分類の結果、吉備の円筒埴輪は4段階にわたって変遷していくが、その様相は畿内と類似しており、古墳時代中期の時点で強い影響下にあったことが推定される。

土器圧痕からみる縄文時代の植物

山本 華

土器圧痕や炭化種子の大型化傾向から、縄文時代のマメ類については日本列島で栽培化された可能性が指摘されている。同様にシソ属についても利用や栽培などの人間活動を解明するため、栽培化の起源を検討する必要がある。シソ属多量圧痕土器の試料で大きさを検討したところ、マメ類のような大型化傾向は確認されなかったが、今後は遺跡出土種実遺体も含め試料数を増やし、より広範な空間と時間軸の中で大きさの変異や変化を捉える。